

2.2.3 教育内容・方法

2.2.3.1 カリキュラムの編成

【評価項目 6-1-1】 教育課程

- (必須要素) カリキュラムの編成方針と教育理念・目的との関係
- (必須要素) カリキュラムの体系性と教育理念・目的との関係
- (必須要素) 学部を置く大学院研究科における教育内容と、当該学部の学士課程における教育内容の適切性及び両者の関係
- (必須要素) 修士課程における教育内容と、博士（後期）課程における教育内容の適切性及び両者の関係
- (必須要素) 博士課程（一貫制）の教育課程における教育内容の適切性
- (必須要素) 課程制博士課程における、入学から学位授与までの教育システム・プロセスの適切性
- (選択要素) 創造的な教育プロジェクトの推進状況

【評価項目 6-1-4】 単位互換/単位認定等

- (必須要素) 国内外の大学等との単位互換方法の適切性

【評価項目 6-1-8】 生涯学習への対応

- (選択要素) 社会人再教育を含む生涯学習の推進に対応させた教育研究の実施状況

<2003 年度に設定した目標>

大学院問題検討委員会および将来構想委員会における検討を通じて、教育課程の改革と改善についてのたゆまぬ努力を継続する。当面の目標を次の通り設定する。

1. 学部と大学院の関係に調整を加え、学部、前期課程、後期課程の間の教育課程の滑らかな連携を実現する。
2. 教育課程に即した専門分野の適切な位置づけを実現する。
3. 学校教育学コースを教育学専攻内に設置して、現役学生のみならず現職教員を中心とする社会人の再教育の要請に応える体制を整えたが、これを安定的に運営する。

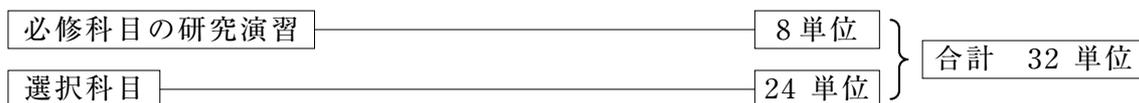
(現状の説明)

文学研究科では、高度な水準における学術研究の達成を目指してカリキュラムを編成している。研究科を構成する10専攻（哲学・美学・心理学・教育学・日本史学・西洋史学・日本文学・英文学・フランス文学・ドイツ文学）では、各専攻を単位として、研究演習、特殊講義、文献研究を基本とする授業科目の編成を行っており、一部に実験研究系の授業科目を配置している。博士課程前期課程では、高い専門性を確保しながら、専攻を超えた学際的な関心に応じることのできる柔軟な履修を可能としている。博士課程後期課程では、授業科目の基本構成を前期課程と共通にしつつも、2000年度から博士学位取得基準を整備し、新たな指導体制とそれを実行するための新設科目「博士論文作成演習」を通じて、課程博士の安定的で着実な養成を目指している。

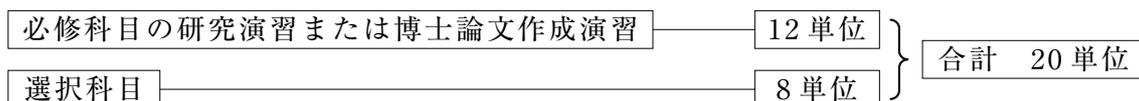
文学研究科の専攻区分と文学部の学科区分とはおおむね一致していたが、2003年度の学部改組によって、両者に新たな連携が要請されることとなった。また、日本史学専攻における東洋史学と、西洋史学専攻における地理学のように、専攻名をもたない専門分野の適切な位置づけは、学部改組以前からの課題として存在している。同様の課題は、教育学と教育心理学、そして2002年度に発足した学校教育学（前期課程のみ）を併せた計3コー

スを有する教育学専攻にも生じており、さらには、文学を掲げる専攻における言語学の取り扱いについても、しかるべき位置づけが必要とされる。

<博士課程前期課程修了要件（必要履修単位数）>



<博士課程後期課程修了要件（必要履修単位数）>



（点検・評価の結果）

研究科を構成する10専攻それぞれのカリキュラムは、文学部のカリキュラムの延長上に設定されてその上位をなすとともに、明確な教育理念と目標に支えられて現在のところは安定的に運営されている。ただし、2003年度の学部改組によって、同年度の入学者が大学院に進学する2007年度には、文学部との新しい連携を前提とした文学研究科の組織改組を実現する必要がある、すでに2004年度から、大学院問題検討委員会と将来構想委員会において検討している。

博士課程後期課程では、2000年度に導入した博士学位取得基準に即して、「博士論文作成演習」の履修を中心とした教育指導体制が順調に機能しており、最短の3年間をもって博士学位を取得しようとする者が確実に増加している。

<新しい博士学位取得基準による博士学位取得者数>

年度	人数
2002	3
2003	1
2004	1

また、本学と関西大学、同志社大学、立命館大学の4大学大学院の協定に基づく単位互換制度は、文学研究科においても長年にわたる実績を重ねており、また、交換留学や認定留学制度によって、外国大学で取得した単位を認定する制度も活用されている。

<過去5年間の4大学大学院交流受け入れ及び送り出し数>

年度	他大学より受入	他大学へ送出し
2001	2	0
2002	4	2
2003	2	1
2004	1	1
2005	3	0

(改善の具体的方策)

大学院問題検討委員会と将来構想委員会では、現在の専門分野を尊重しながら、文学部の現行3学科との連携をとりつつ、大学院の前期課程と後期課程の教育課程をいかなる形態で再編すべきかを議論している。また、前期課程における学校教育学コースの基盤の強化や、広領域としての言語科学（仮称）の専門分野を設置する可能性についても、積極的な議論を重ねている。

さらに、前期課程においては高い学識を身につけて現実社会のさまざまな場所で活躍できる高度専門職業人の育成にあわせた教育課程の可能性、前期課程から後期課程を通じて学位取得に至る一貫した教育課程の実現など、具体的な改革を進行させていく。

2.2.3.2 教育・研究指導のあり方

【評価項目 6-2-3】 社会人学生、外国人留学生等への教育上の配慮

(必須要素) 社会人、外国人留学生に対する教育課程編成、教育研究指導への配慮

【評価項目 6-2-4】 研究指導等（学生の研究活動への支援を含む）

(必須要素) 教育課程の展開並びに学位論文の作成等を通じた教育・研究指導の適切性

(必須要素) 学生に対する履修指導の適切性

(必須要素) 指導教員による個別的な研究指導の充実度

(選択要素) 複数指導制を採っている場合における教育研究指導責任の明確化

(選択要素) 教員間、学生間及びその双方の間の学問的刺激を誘発させるための措置の適切性

(選択要素) 研究分野や指導教員にかかる学生からの変更希望への対処方策

(選択要素) 才能豊かな人材を発掘し、その才能に適した研究機関等に送り込むなどを可能ならしめるような研究指導体制の整備状況

(選択要素) 学生に対し、研究プロジェクトへの参加を促すための配慮の適切性

(選択要素) 学生に対し、各種論文集及びその他の公的刊行物への執筆を促すための方途の適切性

<2003 年度に設定した目標>

大学院問題検討委員会における検討や、専攻代表者会議による議論を通じて、教育・学生指導の改革と改善についてのたゆまぬ努力を継続する。当面の目標を次の通り設定する。

1. 高度専門職業人を目指す学生が増加する中、前期課程修了のみを目的とする学生に対する教育指導体制のあり方を検討する。
2. 学生による学会発表（口頭・ポスター）や審査制度のある学術専門誌への論文投稿・発表を一層活発にする。

(現状の説明)

学部から大学院への進学を早期に決定した学生のために、一部の専攻では大学院と学部に通ずる授業科目を開講し受講させているものの、本格的な教育と研究指導は前期課程入学後に開始される。特殊講義、文献研究などの科目を開講するとともに、主要科目の中核に研究演習を位置づけている。研究演習の担当者は、指導教員として研究指導に携わり、修士論文の作成を指導する。授業担当のほか、指導教授は面談や電子メールなどを通じて、適宜指導と助言を行うが、専攻によっては合同演習などを通じて、指導教員以外の教員が